

さんぽう

三方よし

第14号
2000/2

CONTENT

シリーズ 現代に息づく近江商人魂 ……………	2~4	正野玄三家の古文書5000点を発見 ……………	6~7
シリーズ 近江商人と文化・芸術 西欧衣服文化の伝統と美を考える		催し案内/てんびん棒 ……………	8
財団法人 京都服飾文化研究財団/金言名句⑩ ……	5		

正野玄三家の史料 5000点を発見



正野家の神農像



初代正野玄三像

三方よし 「三方よし」は近江商人共通の経営理念。「売手よし 買い手よし、そして世間よし」の精神で地域社会に大きく貢献した。本紙は近江商人を代表する理念を主題としている。

連載

現代に息づく近江商人魂

【その②】

近江商人の理念は商業の神髄

— おかげさまの人生 —

株式会社平和堂 代表取締役会長 夏原平次郎氏

二〇〇〇年を迎えた本年、夏原平次郎氏は年頭のあいさつの中で「黒い雲の後ろには必ず明るい太陽が輝いている」と生前深い親交のあった越後正一氏（元伊藤忠商事(株)社長・会長）の言葉を引用して、社員に檄を飛ばした。

かつて、近江商人は琵琶湖の鮎に例えられ、近江の国から出て行かないと大成しないと言われていたが、その現状を見事にくつがえし、全国でも有数の総合スーパーを築いてきた。近江に生まれ育ち、琵琶湖で大きくなった鮎に例えられる夏原氏は、昨年出版された自叙伝では、商売に対する基本理念を紹介しつつ後続の社員に本当の小売業の原点を強く訴えている。

商人は正人たるべし

創業の地彦根市銀座商店街

昨年十二月十日に彦根銀座商店街に立地する平和堂第一号店では、周辺商店街のリニューアルを契機として、食品フロアを増設し、三階には県下最大の規模の健康・介護用品売り場を開

的な存在であった彦根銀座店も次第に客足も減ってきた。

農家に生まれ農業を継ぐことが自分の人生と決めていた夏原氏が、ふとしたきっかけから商売を始めた場所がここ平和堂銀座店である。昭和三十三年三月一日、小雪の舞い散る寒い朝、間口三間半の靴とカバンの店「平和堂」が誕生した。

いまでは、県下に六十三店、隣接府県に二十一店、そして一昨年には中国湖南省にも出店するなど大きく発展してきた平和堂の原点がこの場所である。創業の地の地盤沈下は、ここで育てていただいたという気持ちがたくさんに大きい夏原氏にとっては身を切られるような辛いことであつた。

十二月十日、開店の日にはかつての銀座商店街の賑わいが蘇ってきたように、店頭には自転車が溢れ、歩道までをも占領する勢いに並んだ。高齢者が多い土地柄だけに、店内は、広くゆつたりとした配慮がみられ、三階フロアでは、無料の湯茶接待

があり、さらに夏原氏自身のポケットマネーによる茶菓子まで用意されていた。沈滞化の進む商店街では、この時期に歩道やアーケードの工事が完成し、新しい年になってもその勢いは続

いている。

ひょうたんから駒の商人への道

大正八年、彦根市近郊の農家の長男として生まれた夏原氏は、当時の慣習に従い、進学することもままならず、青年時代は農業に従事していた。

その後、軍需工場と化していたマルビシ百貨店をかつての賑わいのある商業の場へと移行することに助力したことが、思わぬ商売の道に進むきっかけとなり、さらに独立店舗を入手したことで、昭和三十三年に彦根銀座街で平和堂を創業した。

しかし、本当の商人として開眼したのは、成瀬義一氏のセミナーを受講したことであったといわれる。「どの人にも公平な値段で正礼販売をし、買っただけの品を品質を保証し、返品やお取り替えは自由とする。商人は正人でなければならぬ」という成瀬義一氏の話を聞いて、小売業こそが一生の仕事であると考えようになったという。

商人として出発してから、ご自身の商人人生哲学の根底は、常に近江商人と同様の哲学で進んでこられた。こうした経緯を以下、ご本人のお話から採録する。



なつはら・へいじろう
 大正八年、犬上郡河瀬村字犬方(現彦根市
 犬方町)に生まれる。昭和十二年、犬上郡
 立河瀬青年学校を卒業。戦後、マルヒシ百
 貨店の再建をきっかけに小売業の道へ。昭
 和三十二年、彦根市銀座に「靴と万本の
 店・平和堂」を開店。同年、平和堂を株式会
 社に改組し代表取締役社長に就任。以降、
 滋賀・福井・京都・大阪・石川・富山へと店
 舗数を拡大。

琵琶湖の鮎と近江商人の定説に挑む

初めて参加した商業セミナーに非常に大きな衝撃を受けました。その時の成瀬先生の持論はもともとと思いつつもなかなか決心できずに、結局年を越してしまつたのですが、翌年の新年の新聞に「滋賀県はわずかな平野で百姓をするしかなかったの

で、仕方なく人々は外へ働きに出る。近江商人は滋賀県内で育つた商人でなく、外へ出て成功した商人である。琵琶湖の鮎は琵琶湖では大きくならないが、よその河川に放流すると大鮎に成長する。琵琶湖の鮎も近江商人も外へ出れば大きくなるが、

中には「育たない」という記事を見たのですが、この時漸く決心が固まり、「そろそろ定説を覆す商人が出てもいいはず。それなら自分がひとつ……」という気持ちがいってきました。ちょうど四十一歳の齢を迎えていたときです。

「地域第一、感謝の気持を大切に」の教えを守って

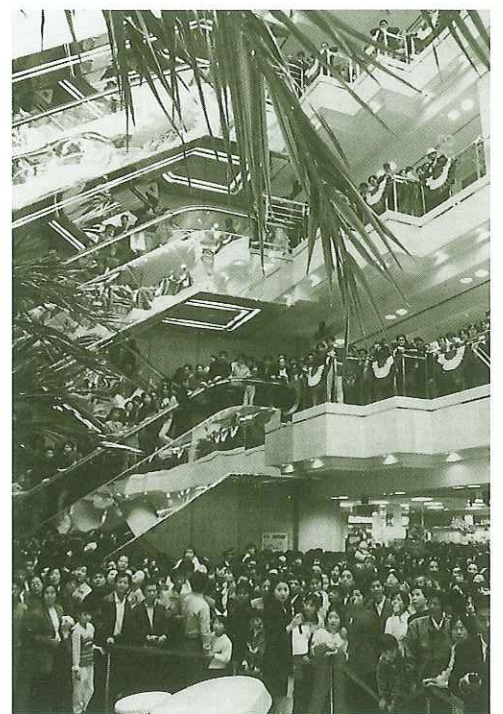
それ以後、成瀬先生から多くの教えをいただきましたが、その中でもいつも心に留めている言葉のいずれもが、かつて近江商人が家訓として大切に継承してきたものと同じ内容のもので

す。例えば、出店に際しては、大切な財産をお借りするかお譲りいただくわけですが、この時いつも「地域のことを第一に考

商業の神髄は近江商人の理念

今思うと、成瀬先生からの教えはまさに近江商人の神髄であったと思われま

す。本年の年頭では、越後正一さ



人、人、人で埋まった中国湖南平和堂のオープン

える」「出店のために譲っていただいた方への感謝を忘れてはいけない」といわれ、堅く守ってきました。

次第に店舗が増えてくると、私の主な仕事は土地の交渉が多くなり、年中駆けずり回っていましたが、「地域第一」「感謝の気持ちを大切に」ということは念頭から離れることはありませんでした。

いたことでこれは役に立つと思われたことは確実に実行される人で、まさに商人としての基本をみた思いがしていました。この越後さんから私が大きな難問を抱えていた時にこの言葉をいただいたのです。

私自身、初めから近江商人を真似するという気持ちではありませんが、本当の商売とは何かを突き詰めて行くと、まさに、近江商人といわれる先人が営々と築き上げてきた商売の理念と同じであったのです。

んから教わった「黒い雲の後ろには必ず明るい太陽が輝いている」ということを社員に話しました。ご承知のとおり滋賀県出身で伊藤忠商事の中興の祖と言われる越後さんは商売の神様と言われた人でしたが、人から聞

先にお話した成瀬先生から「店はお客様のためにある」「借金をする時には必ず返済責任を考



平成10年11月8日に
開店した湖南平和堂

大切な感謝の心と宗教心

私の祖母は大変熱心な仏教徒でした。その影響もあり、子どもの頃から仏教の教えを学び、信心を深めてきました。近江には、いまでも多くの熱心な仏教徒がいますが、仏の教えを信じ、厚い信仰心を持っていたからこそ、仏教の教えに叶った商売をしてきた近江商人の先人たちと同じような行動ができたのではないかと思っています。

今、社会の中で宗教の教育ができていないことは、非常に残念なことです。宗教から得られる感謝の気持ちは私が最も大切

にしていることです。

一昨年、中国の湖南省に平和堂が誕生しました。オープン以来、珍しいことも手伝って、好調な業績を挙げていますが、ここでの成功の大きな要因は現地の社員が、あいさつの基本をきちんとマスターしてお客様に接しているということですが、日本で教育研修をしましたが、こうした社員が現地の人々への良い手本となってくれています。残念ながら、日本ではみられないことです。

「会社」と「社会」の関係

会社ではことあるごとに、「社会」と「会社」の話をします。

この二つの言葉は並べて書くところから社会、会社と読めます。つまり社会はいろんな会社を必要としますが、会社は社会に奉仕しなければならぬのです。社会はどんどん変化していきます。そんな中で社会の変化に対応し続けていくことができない会社は滅びます。会社は社会のお役に立たなければならぬ半面、社会に迷惑を掛けない



大店法の改正後にできた新しい特定商業集積整備法の適用を受けたビバシティ

はいけない。これが会社と社会の有りようだということをお話します。

二十一世紀を目前にして、さらに大きく社会は変化していくことですが、こうした中で、さらに企業存在の意義が大きなものになると思います。つまり社会の変化に巧く対応してきた近江商人の知恵をまさに今、現代に生かすべき時であると思っています。

株式会社平和堂の概要

本社所在地 滋賀県彦根市小泉町31番地
 設立年月 昭和32年6月(東証・大証第1部、京証上場)
 代表者 代表取締役社長 夏原平和(なつはら ひらかず)
 売上高 2,953億円
 店舗数 84店舗(平成11年8月20日現在)
 滋賀県…63店舗 京都府…7店舗 大阪府…3店舗
 福井県…6店舗 石川県…4店舗 富山県…1店舗

■社章

(株)平和堂の社章は、対立しつつ調和するところに発展があり、繁栄する「対立と調和」のマークとして二羽のハトを表している。



■ご奉仕高

売上はお客様へのご奉仕の成果であり、粗利益は私たち皆で知恵を出し合って作り上げた付加価値を示すという夏原氏の理念から、売上高をご奉仕高、粗利益を創造高と表現している。

近江商人と文化・芸術

西欧衣服文化の伝統と美を伝える 財団法人 京都服飾文化研究財団

女性の美を追求し続けた塚本幸一とワコール



昨年のAKINDOセミナー講演会で、多摩大学教授の望月照彦氏が「文化を支えるのが商業者であり、文化があるところには商業が栄える。文化こそ歴史こそが何より価値があり、これらを視点に入れてこそ、地域の活性化や商工業の発展がある」という内容の話があった。混迷する経済状況の中での一時的なカンプル剤の効果もなく、根本的な経済活性化策が模索されている中、企業や経済の発展の根底に潜む地域文化の醸成こそが大きな成果をあらわすのではないかと思われる。既に経済優先からもった文化の視点的施策の必要性が叫ばれている。財力があるから文化支援をするのではなく、本来の企業の文化支援にはもっと壮大な意図が必要であろう。

女性の美を追求し続けた 創業者の塚本幸一

世界的に有数の女性下着メーカーであるワコールの創業者、塚本幸一氏は、平成十年に七十八歳でご逝去された。AKINDO委員会の事業にもことその他、多くのご協力をいただいております。現代の近江商人として女性の美しさを作るための努力を続けてきた人である。

戦後、ビルマの激戦地から復員後、装身具などの行商から身を興し、やがて世界で有数の女

性下着メーカーとして確固たる基盤を作り上げてきた。両親とも滋賀県の出身という生粋の近江商人の家庭に育った塚本氏は、仙台で生まれたが、その後「近江商人の士官学校」と呼ばれた近江八幡商業学校に学び、ここでの学友とともに世界のワコールを築き上げた。事業以外にも地域の産業振興にも大きく貢献してきた人であり、近年には京都建都二二〇〇年実行委員長として大きな功績が残る。戦後の近江商人の典型的な精神で企業を牽引してきた。ワコール

は主力のファンデーションからスポーツウェアまでを積極的な市場拡大と優れた企画力で安定した実績がある。

このワコールの支援によって誕生したのが、京都服飾文化研究財団である。

財団の設立と活動

西欧に源を持つ現代の日本の服飾は、本来日本で育っていないことが、その本質を十分理解し、消化することを妨げている。西欧の衣服は長い伝統を持ち、

人間との生活に深く関わり、時代の変革に敏感に反応しながら変遷してきた。そのあり方や時代背景などを学ぶことは現在の服飾を正しく理解し、衣服の未来を考えるために重要であると考え、それらを体系的に収集し、研究・公開する機関として、昭和五十三年四月に財団法人 京都服飾文化研究財団が文部省の

認可を受け、ワコールの支援によって設立された。財団では、収集された服飾文化に関する史料を熟練した専門家による補修を行い、適切な保存環境によって収蔵されている。日常は非公開ではあるが、機関誌「DRESS STUDY」の刊行や各種の展示会などで一般に公開している。

近江商人の金言名句⑭

人富則奢（人富めば即ち奢る）

「近勘」初代勘兵衛の家訓より

富を追求するのが商人の道であるが、近江商人は富むことによって心奢るのを堅く戒め、それを共通のモラルとした。大溝村から東北・盛岡に渡った近江商人「近勘」の家訓は、この「人富則奢」を第一の戒めに、以下、「奢則背礼（奢れば即ち礼に背く）。背則人悪（背けば即ち人にくまる）。悪則災来（にくまれば即ち災い来る）。来則成損（来たれば即ち損となる）。成則家貧（なれば即ち家貧し）。貧則人賤（貧しければ即ち人いやし）。賤則起欲（いやしければ即ち欲起る）。起則為罪（起れば即ち罪をなす）。為則身亡（なせば即ち身ほろぶ）」と説き、富むことによる心の奢りが破滅につながることを平易に論じている。

歴史の節目をどう区切るかは一人ひとりの歴史観で大きく変わるが、戦後から今世紀末を一つの節目として、バブル経済後のわが国の歩みを辿れば、陽炎の富に翻弄され、企業も国民も自利に走り、奢侈や逸楽活動に目を奪われていた。そして、社会的構造欠陥や精神的荒廃問題をなおざりにしてきたツケが、今「負の遺産」として噴き出してきているといえる。

二十世紀幕引の年は、百年単位の世紀末であると同時に、一千年の大世紀末でもあるが、近江商人の家訓は不易なるものとして次世紀に引き継いでいくべきもののひとつであろう。

正野玄三家の古文書五千点発見

（日野町）

かねてより近江商人研究ネットワーク会議では、日野正野玄三家の古文書の調査を進めていたが、ようやく整理が終了し、昨年十二月十四日に滋賀県庁において、史料の概要を公表した。今後さらに詳細な研究を進めることになっているが、近江商人の研究にとっては貴重な史料となっている。

史料調査の経緯

正野玄三家は「萬病感應丸」の製造と販売で知られる日野商人であるが、戦前の企業統制と薬事法の改正により、「萬病感應丸」は町内の日野薬品で製造されている。現存する正野玄三家の屋敷は、平成十一年に登録された史料は、この屋敷内の蔵が平成九年の台風により損傷し、取り壊す際に見つかったものである。

史料は発見後、近江商人研究ネットワーク会議によって整理され、順次その内容についての研究が始まっている。

日野町の商家の史料としては中井家の史料が有名でその多く

の史料は長年にわたり、研究者たちによってその内容が発表されているが、正野家の場合には販売に関する史料はもとより薬の製造に関する史料も多く、その全体の解明が待たれる。

一方で、近江鉄道の設立などにも係わった明治の頃の史料も多く、当時の状況を知る上でも貴重なものとして多くの研究者の注目するところとなっている。

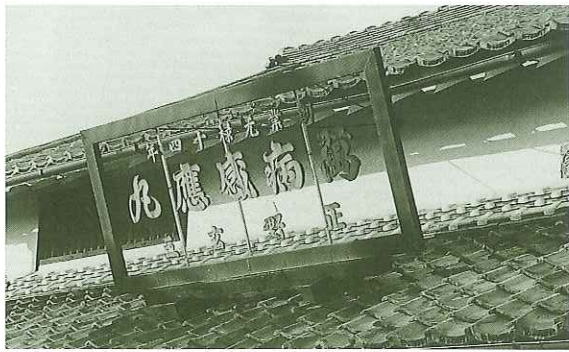
多くの史料の具体的な解明については今後の研究を待つが、概要を紙面で紹介する。

発見された史料の特徴

行商をはじめるといった経緯や、創業当時の事情を知る手掛かりとなる、十七世紀から二十世紀にわたる経営帳簿が多く残り、連続的かつ多様な史料として貴重なものである。

さらに、当時の製薬技術や薬種の流通を通じて、長崎貿易との関係を語るものも含まれ、日野と長崎貿易との関係を伝える興

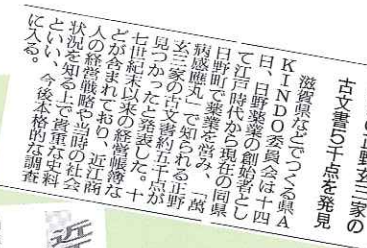
味深い史料もある。一方で、当時の滋賀県の社会、経済情勢や民俗伝統（冠婚葬祭）を知り得る周辺史料が多く、とりわけ明治六年に創刊された滋賀県で最初の印刷新聞である「琵琶湖新聞」は創刊号から第31号（27号、30号は欠番）までが残り、各所での欠番を補う史料である。



正野家



正野家古文書で中間報告
薬材の流通克明に



製薬の正野玄三家の
古文書五千点を発見



近江商人の商法解明に光



近江商人の古文書5000点
日野で見 商取引や薬の調査

正野玄三家とその歴史（「萬病感應丸」の誕生とその販売）

日野の正野家は一五〇四年頃より関東方面に商いをしていた旧家であり、六代目の三男で、万治二年（一六五九）に七代目を継承した萬四郎も、はじめは東北の諸国に商売していたが、母の病気を治癒した京の名医として名高い名護屋丹水の門をた

とき、人の命を救う医業への道を志すこととなった。

三十五歳で入門が叶い、その後医療の研鑽に勤め業績は次第に広がっていった。元禄十年（一六九七）に剃髪して玄三と改めた。医者としての名声は高まったが、直接の治療には限界



「萬病感應丸」

ジャコウ・牛の胆汁・ゴオウ・沈香末、真珠、人參末を線分にしたもので、消化不良、下痢、息切れ、ひきつけなどに良く効いた。はじめは粉薬を紙に包んだもので、取り扱いや持ち運びに不便があり、やがて米の粉をつなぎにして扁平で半月形の丸薬にされた。ちょうど1円硬貨を半分に切った大きさで、今は銀箔が施されているが、当時は金箔で高級品のイメージであった。

があることを感じた玄三は、病気で困っている多くの人々の治療のためにと元禄十四年（一七〇一）に「神農感應丸」「萬應丸」の調査に成功した。

正徳四年（一七一四）正月より一齊に販売を開始。その後玄三は医療と売薬を兼業した。これらの売薬は携帯に便利なことから多くの人々に歓迎され、また日野商人をはじめとする近江商人が全国に持ち下って宣伝販売をしたことで、急速に普及していった。そして、「神農感應丸」はよろずの病に特効があるということから「萬病感應丸」と改称された。

今回発見された史料には、薬の調査を記した「永代調合」等があり、当時の製薬技術や薬種を知ることができる。また薬の販売先を記録した「諸方看板」には、現在の長野県や秋田県などの地名も見られるなど、当時販路を全国に拡大していった様子が見え、各地の近江商人の出店の店頭には特約店の看板とともに萬病感應丸を販売していたという事実が立証された。

やがてこの薬の評判が高まる

と正野家のみでの製造が追いつかず、寛保三年（一七四三）には日野町内には百九軒の合業業者が出現している。

地域経済の振興に尽力した正野玄三家

慶応十五年（一八七九）四月に正野家の女婿となった十五代正野玄三は、本業の業務を拡張するかわら、町会議員・県会議員・日野町長を歴任し地方行政に大きな功績を残した。さらに、日野製薬株式会社や伊予紡績株式会社などを設立するなど実業界でもその手腕をおおいに発揮してきた。

そして明治二十七年には、同じく日野商人中井源左衛門や小林吟右衛門、阿部市郎兵衛らの

慶応十五年（一八七九）四月に正野家の女婿となった十五代正野玄三は、本業の業務を拡張するかわら、町会議員・県会議員・日野町長を歴任し地方行政に大きな功績を残した。さらに、日野製薬株式会社や伊予紡績株式会社などを設立するなど実業界でもその手腕をおおいに発揮してきた。

そして明治二十七年には、同じく日野商人中井源左衛門や小林吟右衛門、阿部市郎兵衛らの



近江鉄道の設立と近江商人

明治二十九年（一八九六）九月、地元資本の出資によって彦根・愛知川・八日市・豊生川を結ぶ近江鉄道の建設が始まった。

古来より、伊勢参りには、中山道から御代参街道を経て、土山から東海道に入るルートが一般的であったが、この道路網に代わる鉄道の敷設が近江鉄道設立の主な目的であった。会社の設立には、彦根市の大東義徳や西村捨三をはじめ、中井源左衛門、正野玄三、小林吟右衛門、阿部市郎兵衛ら近江商人の出資、資本金百万円で設立された。

着工した年の琵琶湖周辺には、史上最大の水害が襲った年でもあり、さらに日清戦争後の不況も重なり、当初の百万円の資金では全線の工事が不可能となり、工区を分けての実施となった。明治二十九年に起工し、明治三十一年には彦根・八日市間が優先して開通した。開業当時は一日に上下各五本を運行し、第二期工事の八日市・豊生川間の着手はさらに一年後となり、この間の資金調達には困難を極めたが、株主の並々ならぬ意気込みで工事は再開された。

開業すると、各私鉄と提携した明治三十三年十二月三十日から翌三十四年一月五日までの期限付き伊勢参宮大割引が当たり、この間の乗降客は二万七千人余にのぼった。近江鉄道の開業による沿線住民の歓喜は大きかったが、会社の経営は、開業祝賀記念式当日にも午後からは、財政整理案を審議しているという状況であった。

AKINDO委員会では「近江商人」をキーワードとして21世紀の経済社会に対応できる経済人の育成をめざす人材育成事業の一環として、滋賀県産業支援プラザとの共催で小売商業界で著名な実業家・評論家を迎え、今後の商いの展望を探るための講演会を開催します。

21世紀に向けての商いの展望を探る AKINDOセミナー2000講演会開催

日時/平成12年3月6日(月) 午後1時30分~4時45分
場所/大津プリンスホテル(大津市におの浜4-7-7)

第1部

危機はチャンス—日本経済が直面する課題—

大田弘子 (政策研究大学院大学助教授)



おおた・ひろこ
1954年、鹿児島県生まれ。76年、一橋大学社会学部卒業。(財)生命保険文化センター研究員、大阪大学経済学部客員助教授、埼玉大学助教授を経て、97年10月より現職。専門分野は、財政、経済政策。税制調査会委員、産業構造審議会委員、などを務める。著書に、「リスク経済学」(東洋経済新報社)、「安全と安心の経済学」(共著、岩波書店)、「経済改革のビジョン」(共著、東洋経済新報社)など。

第2部

暗雲に蒼空を見る—甦れAKINDO魂—

上村多恵子 (京南倉庫株式会社代表取締役社長)



うえむら・たえこ
甲南大学卒業。在学中に、京南倉庫株式会社代表取締役社長に就任。1978年に京南物流株式会社、88年に株式会社ドラマモードを設立し、同時に代表取締役役に就任。現在、甲南大学常任理事、京都経済同友会常任理事、などを務める。商品開発や町づくりに参画し、京都のネオ・ルネッサンス運動を目指す一方、詩、エッセイ、小説などの執筆も行う。著書に、「無数の苛めーション」(レモン社)、京都物語(山と溪谷社)など。

定員500名 入場無料(ただし入場整理券が必要)
講演会参加希望者は官製はがき・電話・FAX・電子メールで郵便番号・住所・氏名・電話番号を記載の上、下記までお申込みください。
【申込先】〒520-0044 大津市京町4-1-1 滋賀県中小企業振興課内AKINDO委員会事務局
電話 077-523-4641 FAX 077-528-4877 E-mail: akindo@mx.biwa.ne.jp

■本書の概要
A5判 664頁
著者 上村雅洋
発行所 清文堂出版株式会社
定価 16,000円(本体)

和歌山大学経済学部教授で近江商人研究ネットワーク会議委員でもある上村雅洋氏が、『近世日本海運史の研究』に次いで二冊目の著作『近江商人の経営史』をこのたび清文堂出版より上梓された。上村氏は滋賀大学に在職当時より近江商人の史料についての研究を続けられており、西川伝右衛門家の史料研究についての大きな功績をはじめ、すでに各方面で多くの論文を発表されている。本書はこれら研究の成果を七百頁におよぶ大作としてまとめられたものである。本書発行に際しては、五個荘町の塚本定右衛門家の支店経営を書き下ろされ、全14章から構成されている。以下本書に掲載目次を列挙し、紹介にかえることとする。

近江商人ネットワーク会議委員
上村雅洋氏
『近江商人の経営史』
を上梓



- 第1章 近江商人西川伝右衛門家の松前経営
- 第2章 近江商人岡田弥三右衛門家の経営
- 第3章 近江商人の在村形態 近江愛知郡柳川村の場合
- 第4章 近江商人市田清兵衛家の経営
- 第5章 近江商人谷口兵左衛門家の経営—雇用形態を中心に—
- 第6章 近江商人外村与左衛門家と家業
- 第7章 近世における近江商人外村宇兵衛家の経営
- 第8章 明治期における近江商人外村宇兵衛家の経営
- 第9章 近江商人外村宇兵衛家の雇用形態
- 第10章 近江商人外村宗兵衛家と家訓
- 第11章 近江商人外村市郎兵衛家の経営
- 第12章 塚本定右衛門家の支店経営
- 第13章 近江商人の雇用形態
- 第14章 近江商人の経営システム

てんびん棒

本年一月十四日、近江商人発祥の地として知られる五個荘町が「住民参加のまちづくり」で自治大臣賞を受賞された。近江商人屋敷が多く残る金堂地区はすでに重要伝統的建造物群保存地区に選定されているが、五個荘町では「町ぐるみまるごと博物館」構想のもと、平成七年に新たな文化発信施設として「てんびんの里文化学習センター」を開設し、この建物の三階に「近江商人博物館」を開館。この館を中心として周囲に点在する近江商人屋敷、旧外村宇兵衛邸・外村繁文学館・あきんど大正館・歴史民俗資料館(旧藤井彦四郎邸)をサテライトとして公開している。近江商人博物館を中心として、風情を感じるまちなみや、これらの資料館をめぐる、近江商人や五個荘の歴史にふれることができる。

こうした五個荘町の努力にもかかわらず、近江商人の発祥の地の区分として五個荘商人という言葉がはずされ、近江八幡以北、湖東地方一帯から発祥した商人群は、まとめて「湖東商人」と包括されている。かねてよりこの呼称については五個荘町から不満の声があつたが、一連の事業の展開によって既に近江商人の発祥の地としての知名度が高まり、「五個荘商人」の呼称が浮上するに時間はかからないことであろう。